

松下幸之助氏の信念と尽力

―自衛隊を支えた大阪財界人―

森 清勇 陸自62

本文は『偕行』2019年9月号記載の「寺内寿一元帥と安宅彌吉氏」の記事で、大阪人が旧軍隊を応援した話に触発され、現自衛隊にも同様なことがあることを披歴するものです。

防衛庁・自衛隊が外郭団体として最も期待した組織に、全国防衛協会連合会（以下「連合会」と略称）があります。省昇格にあたり、国民への普及などで期待されたのがこの連合会で、20万部印刷されたパンフレットのうちの半分10万部が連合会に依頼され、その他は隊友会などをはじめとした民間諸団体や地方自治体などへ依頼されたと聞きました。

連合会は、本年（令和元年）創立30周年を迎え、去る6月記念式典や講演、祝賀会などを行いました。筆者は、平成18年から5年間、連合会事務局で機関紙編集を行い、その間に20周年を迎えて同様の行事を行ったところです。

連合会は「防衛意識の高揚を図り、防衛基盤の育成強化に寄与する」「自衛隊の活動を支援・協力する」とい

う目的を掲げて平成元年10月に発足した民間人（会員約60万人、機関紙3万部発行）の組織です。

自衛隊の応援組織は自衛隊発足直後の昭和30年代から、草の根的に駐屯地や基地を中心に発足しています。が、いずれも同業者家族の応援団的なもので、上下左右の連携は著しく限定されたものでした。というのは他でもありませんが、自衛隊に対する悪感情が吹き荒れており、市民などの参加はためらわれたからです。

そうした中で、昭和38年に北陸で豪雪災害が発生し、自衛隊が救出・救援に出動しました。その献身的な姿に感銘を受けたのが松下幸之助氏でした。そして氏が、大阪で防衛協会が発足する切っ掛けを作ります。

〈大阪防衛協会〉のホームページを開くと、由緒が「昭和38年1月、裏日本一体を襲った豪雪に際し、自衛隊が出動し、約1カ月にわたり献身的な働きをするとともに、自衛隊が国土防衛に精励されている姿に接し、当時の松下幸之助氏を初めとする大阪財界人が、心から感謝の気持ちを持って自衛隊に対する国民の理解を深め、その使命達成に協力し激励しようと呼びかけて、昭和39年2月に創設されたものであります」と書かれています。

松下氏は2億円の私財を寄付され、大阪防衛協会の初代会長として尽力されます。これが嚆矢となり、その後府県レベルで同種協会の結成が進み、東京都では日経連から桜田武氏を会長に迎えて自衛隊協力が昭和41年に結成されます。その後、旭化成の宮崎輝氏が会長に就くが「俺は軍隊では一兵卒だった」として、裏方（副会長）として支援を求められたのが同社にいた陸士58期をトップで卒業し、シベリア抑留経験もあつた山口信夫氏でした。

昭和50年代になると地域ブロックの結成もすすみ、60年代では全国化の声が高まっていく。こうして平成元年に念願の全国防衛協会連合会が発足すると宮崎輝東京都防衛協会会長が兼務で全国の初代会長に就任、平成4年には山口信夫氏が2代目会長となり、会の目的達成に一段と力が注がれます。

なお、連合会に参集する都道府県の防衛協会は北海道自衛隊協力が連合会、京都府防衛協会、福岡県自衛隊協力が連絡協議会などのように「都」「道」「府」「県」を冠していますが、只一つ大阪のみが「府」を冠しない「大阪防衛協会」となっているのは、魁となった当初名の自負からであろうか。

いま一度、全国防衛協会連合会発足の発端を作った大阪財界人に目を向けてみます。大阪防衛協会の機関誌「まもり」2016号（平成31年4月1日）編集者欄「榎滴」には、「55年前、松下幸之助初代会長は『自分を守り、家族を守り、社会を守り、国を守るの日本国民の当然の義務である』と訴えている」と記されています。

いまや「自分の国は自分で守る」が合言葉のように発されますが、「自衛隊は税金泥棒」と批判され、子供の小学校入学にさえ反対される状況であった当時、堂々と「国を守るの日本国民の義務」と言い切れたのは、松下幸之助氏の人物の大きさと国民の絶大な尊敬があつたからでしょう。

「商人の街・大阪」とやや軽薄的意味で発せられることもありませんが、安宅彌吉氏や松下幸之助氏には商業の発展は国家の安全、すなわち軍隊や自衛隊が健全であつてこそ保証されるという確固たる信念が伺えます。

大阪防衛協会は今日でも先進的な活動を続けており、この種団体が行う部隊の激励・慰問や海自練習艦隊歓迎行事、音楽会や防衛講演会などのほかに、大阪府民に自然のうちに馴染んでもらう防衛・防災フェスティ

バルを例年実施され、中心となっているのが姥原康治事務局長です。氏は防大卒業間もなく小説『小原台』を刊行された文筆家で、中方総監部では総務部長でした。

定年後は民間企業に勤務しながら事務局長に就任され、全国防衛協会連合会の理事会等では鋭い問題提起を行うことを常とされていきました。数年前には「あなたに勇気を！ 日本に誇りを！ 世界に平和を！」の副題を付けた（大阪防衛協会の）『50年のあゆみ』を出版されるなど、幸之助氏が灯した火を現在に至るまで明々と灯し続けておられます。